

西脇順二郎



西脇順三郎

昭和五十年二月二十日 初版印刷
昭和五十年四月十五日 初版發行

日本の詩 西脇順三郎

編 者 鍵 谷 幸 信

発行所 株式会社 ほるぶ出版

東京都新宿区新宿二丁十九番十三
代表 山浦喜三夫

総発売元 株式会社 ほ る ぶ

代表 中 森 蒔 人

製作 東京連合印刷株式会社

目

次

Ambarvalia	八
Ambarvalia	八
LE MONDE ANCIEN	一
リコスの歌	一一
ギリシア的抒情詩	二
天 気	三
カブリの牧人	三
雨	三
董	三
太 陽	五
眼	六
皿	七
拉 典 哀 歌	八
LE MONDE MODERNE	一
馥郁タル火夫	一一
恋 歌	一六
失 樂 園	一七
世界開闢説	一八
薔薇物語	一九
旅 人	二〇
旅人かへらず	二一
はしがき…幻影の人と女	二二
一 旅人は待てよ	二三
二 窓に	二四

三	自然の世の淋しき………	吾
四	かたい庭………	吾
五	やぶがらし………	吾
六	梅の樹脂………	吾
七	りんどうの咲く家の………	吾
八	あのささやき………	吾
九	十二月になつてしまつた………	吾
一〇	十二月の末頃………	吾
一一	ばらといふ字はどうしても………	吾
一二	浮草に………	毛
一三	梨の花が散る時分………	元
一四	暮れるともなく暮れる………	元
一五	行く道のかすかなる………	吾
一六	ひすいの情念………	吾
一七	珊瑚の玉に………	吾
一八	白妙の唐衣きる松が枝に………	吾
一九	桜の夜は明けて………	吾
二〇	蔽に花が咲く頃………	吾
二一	昔の日………	吾
二二	あの頃桜狩りに………	吾
二三	三寸程の土のパイプをくはえた………	吾
二四	雨のしづくを含むはぼたん………	吾
二五	「通つて來た田舎路は大分………	吾
二六	董は………	吾
二七	毛 古のちぎり………	吾
二八	学問もやれず………	吾
二九	元 蒼白なるもの………	吾
三〇	春には………	吾
三一	犬のをかしく戯れる………	吾
三二	落ちくぼむ岩………	吾

三	櫟のまがり立つ……	呪	あの頃のこと……
四	思ひはぶるへる……	咒	きりぎりすの声……
五	青いどんぐりの先が……	呪	どんぐりの実のやさしき……
六	はしばみの眼……	呪	青銅がほしい……
七	毛暮るるともなき日の……	呪	炎天に花咲く……
八	窓に櫻の枯葉が溜る頃……	呪	岩石の淋しさ……
九	九月の始め……	呪	女郎花の咲く晩……
十	窓口にたほれるやうに曲つた幹を……	呪	くもの巣のはる藪をのぞく……
十一	高等師範の先生と一緒に……	呪	檜の木の青いどんぐりの淋しさ……
十二	のぼりとから調布の方へ……	呪	さいかちの花咲く小路に迷ふ……
十三	或る秋の午後……	呪	土の幻影……
十四	小平村を横ぎる街道……	呪	とびの鳴く……
十五	あけてある窓の淋しき……	呪	女の笑ふ寝顔……
十六	武藏野を歩いてゐたあの頃……	呪	心は乱れ……
十七	百草園の馬之助さんは……	呪	…………

三	地獄の業をなす男の………	𠂇	六	こま駅で夏の末………	𠂇
四	坂道で雉の声をきく………	𠂇	九	九月になると………	𠂇
五	よせから………	𠂇	八〇	秋の日ひとり………	𠂇
六	野辺に出てみると………	𠂇	八一	昔の日の悲しき………	𠂇
七	空 こほろぎも鳴きやみ………	𠂇	八二	鬼百合の咲く………	𠂇
八	空 岩の上に曲つてゐる樹に………	𠂇	八三	雲の水に映る頃………	𠂇
九	夕 夕顔のうすみどりの………	𠂇	八四	耳に銀貨をはさみ………	𠂇
一〇	十 都の街を歩いてゐた朝………	𠂇	八五	よもぎの藪に………	𠂇
一一	十一 河柳の葉に………	𠂇	八六	糞つた橋のまがりに………	𠂇
一二	一二 昔法師の書いた本に………	𠂇	八七	古木のうつろに………	𠂇
一三	一三 河原の砂地に幾千といふ………	𠂇	八八	女郎観音の唐画………	𠂇
一四	一四 秋の日も昔のこと………	𠂇	八九	兎 竹が道にしたたる………	𠂇
一五	一五 誰が忘れて行つたのか………	𠂇	一〇〇	金 渡し場に………	𠂇
一六	一六 木のぼりして………	𠂇	一一	金 あの頃の秋の日………	𠂇
一七	一七 むさし野を行く旅者よ………	𠂇	一一一	𠂇 或る女がゴーガンの絵と………	𠂇

一一	暗いはたごやの二階で……	𠂇	一〇	むくの実が坂に降る頃……	𠂇
一一	「失はれた淨土」は……	𠂇	一〇	ゐろりに……	𠂇
一一	盲人の書いた地獄……	𠂇	一一	八月の末頃……	𠂇
一一	ロココの女……	𠂇	一一	橡に……	𠂇
一一	春はまだ浅い……	𠂇	一一	とき色の幻影……	𠂇
一一	𠂇 風は庭をめぐり……	𠂇	一一	あかのまんまの咲いてゐる……	𠂇
一一	六 露にしめる……	𠂇	一一	くぬぎの葉二三枚……	𠂇
一一	九 ゴブラン織の淋しさ……	𠂇	一一	西国の温泉にしようか……	𠂇
一一	一〇 垣根の……	𠂇	一一	旅につかれて……	𠂇
一一	一一 水色の葫蘆のさがる町……	𠂇	一一	二七 雨の降る天をみながら……	𠂇
一一	一二 草の実の……	𠂇	一一	二八 偉大な小説には……	𠂇
一一	一二 庭の……	𠂇	一一	二九 人間の声の中へ……	𠂇
一一	一二 八月の末にはもう……	𠂇	一一	二〇 色彩の世界の淋しき……	𠂇
一一	二五 虫の鳴く声……	𠂇	一一	二一 何事か想ふ……	𠂇
一一	二六 さびれ行く穀物の上……	𠂇	一一	二二 十二月の初め……	𠂇
一一	二七 なでしこの花の模様のついた……	𠂇	一一	二三 十二月の初め……	𠂇

「三 山の椿は……	一一七	「三 野に咲く……	一一三
「四 影のない曼陀羅の……	一六	「三 しやくやくの咲く……	一一三
「五 向ふから……	一六	「四 秋の夜の悲しき手を……	一一四
「六 或る日のこと……	一九	「四 野に摘む花に……	一一五
「七 恋人の暮色の中に……	一九	「四 たそがれの色に……	一一五
「八 何者かの投げた……	一〇	「五 何者か……	一一五
「九 むらさき水晶……	一〇	「六 秋の日によろめきに……	一一六
「一〇 桃の木に彫む……	一〇	「七 村の狂人まるはだかで……	一一六
「一一 衣裳哲学こそ……	一一	「八 哭茄子に穴をあけ……	一一七
「一二 茶碗のまろき……	一一	「九 庭の隅人知れず……	一一七
「一〇 錦の織物……	一一	「一〇 風になびく金髪の少年……	一一八
「一二 榎の古木くちる……	一二	「一一 夏の日は……	一一九
「一三 花咲くいばらの垣根……	一二	「一二 斑猫の出る街道を……	一二〇
「一四 名の知れぬ石の幻像に……	一二	「一三 折にふれ人知れず……	一二〇
「一五 秋のきりん草の中へ……	一二	「一四 杉菜を摘む……	一二一

一五	うららかな情念のまがり	三三	一六 永劫の根に触れ	四〇
一四	座敷の廊下を行くと	三三	近代の寓話	一四
一五	何事をか語る	三三	序	一四
一六	ふところにパン粉を入れ	三三	近代の寓話	一四
一七	旅に出る時は	三三	キヤサリン	一四
一八	旅から旅へもどる	三三	アン・ヴァロニカ	一四
一九	山のくぼみに溜る木の実に	三三	冬の日	一四
二〇	草の色	三三	無常	一四
二一	秋の夜は	三三	山櫛の実	一四
二二	秋の夜の雨	三三	磁器	一四
二三	世の中に奇蹟の現れを見るため	三〇		一四
二四	めざめる夢を見る男の如く	三〇		一四
二五	心の根の互にからまる	三三		一四
二六	若葉の里	三三		一四
二七	山から下り	三三		一四
I	第三の神話	一四		
二八	猪	一四		

十 月	コップの黄昏	一四
デッサン	イタリア紀行	一五
雪 の 日		一六
二人は歩いた		一七
失われた時		一八
I		一九
豊饒の女神		二〇
最終講義		二一
えてるにたす		二二
菜園の妖術	壊 歌	二三
宝石の眠り	鹿 門	二四
		二五
		二六
		二七
	愛人の夏	二八
	神々の黄昏	二九
	野原の夢	三〇
	天国の夏	三一
	愛人の夏	三二
	神々の黄昏	三三
	I	三四
		三五
クラマ		三六
旅人の話 I		三七

人と作品	北海の旅
	海の微風
	元 旦
	醜 未
	鍵谷幸信
	四〇七

Ambarvalia

LE MONDE ANCIEN

コリコスの歌

浮き上れ、ミユウズよ。

汝は最近あまり深くポエジイの中にもぐりてゐる。

汝の吹く音楽はアビドス人には聞えない。

汝の喉のカーブはアビドス人の心臓になるやうに。

ギリシア的抒情詩

天 気

(覆された宝石)のやうな朝

何人か戸口にて誰かとささやく

それは神の生誕の日。

カブリの牧人

春の朝でも

我がシリヤのパイプは秋の音がする。

幾千年の思ひをたどり。

雨

南風は柔い女神をもたらした。

青銅をぬらした、噴水をぬらした、

ツバメの羽と黄金の毛をぬらした、

潮をぬらし、砂をぬらし、魚をぬらした。

静かに寺院と風呂場と劇場をぬらした、

この静かな柔い女神の行列が

私の舌をぬらした。